近現代フランス史における「議会史」の誕生

——第三共和政前期（一八七〇－一九一四年）の議会史研究の展開と課題——

谷口良生

はじめに

近現代フランス史と議会史——議会史といえばイギリス史の「専売特許」の感もあるが、同時に、フランス革命による近代的市民（国民）の誕生とそれを代表する議会制民主主義の展開という歴史をふまえれば、この組みあわせにさほどの驚きはないだろう。[1] にもかかわらず、近現代フランス史において「議会史」なる分野が明確に意識されるようになったのは、不思議にも近年のことである。いくつかの背景を指摘できるが、まずは政治史より社会経済史、エリートより民衆に関心を寄せたアナール学派以来のフランス史学（あるいは歴史学全体）の伝統があるだろう。また、イギリスとは異なりフランスでは、中世以来の身分制議会が大革命直前まで途絶していた。さらに、現行の第五共和政が、それ以前の第三・第四共和政とは異なり、執行権を強化し、議会主義から一定の距離をとったことも指摘しうる。これらの要因が複合的に重なりあい、この奇妙な状況はあらわれている。

本稿は、こうした現状を認識しつつ、第三共和政期（主にその前期）に焦点を絞って、議会や議員、選挙といった広く議会政治と関連する分野の諸研究がどのように展開してきたかを整理する。これらの潮流は、近年、これまで近現代フランス史では確立されてきたとはいいがたい領野である議会史を構築する動きに収束しつつある。ゆえに本稿は、確立途上の古くて新しい議会史という分野の構築過程をたどることになろう。

ここで対象時期を第三共和政前期に限定しているのは、もちろん筆者の能力のゆえでもあるが、「議会政治の黄金期」として議会共和政とも称される当該期に研究が集中しているように思われ

るためである。それゆえ、この時期を対象とする研究を跡づけることで、近現代フランス史における「議会史」の誕生について語ることも許されよう。

とはいえ、古くからある政治史叙述に舞台の一つとして議会が登場するのはいわば当然であり、とくに議会主義的な性格を強くもつ第三共和政については、一般的な政治史研究が議会のなかで展開される事件やその主体に着目することも決して珍しくない。そのため、これまでに蓄積されてきた研究は膨大なものとなり、ここですべてをあつかうことはできない。以下では、そのなかでも大きな潮流をたどることを優先し、その成果や課題を明らかにすることに努めたい。

① ここでフランス議会の特徴を以下の三点としてまとめたい。一点目に、フランスは国単位として世界ではじめて男子普通選挙制を導入した（一八四八年）。国会および地方議会のいずれにおいても、原則、満二一歳以上のフランス市民男性に選挙権が与えられた。対して、女性に選挙権が与えられたのは遅く一九四四年のことである。二点目に、フランスでは、イギリス流の二大政党制ではなく、多党制による議会政治が展開されてきた。三点目に、フランスでは伝統的に、国会と地方議会など複数の議会（市町村長職も含まれる）で同時に議席をもつ兼任がきわめて高い割合で実践されている。

第一章　古典的政治史のなかの議会（同時代〜一九七〇年代）

まず、第三共和政期から一九七〇年代ごろまでの研究を整理してみよう。この時期には、主として古典的政治史叙述の枠組みのなかで議会や議員たちがとらえられていたといってよい。はじめにこうした叙述的な成果について述べたうえで、それとはやや性格を異にする分析的な選挙研究についてふれることとしたい。さらには、とくに同時代の動きとして議会制度に関する動向も簡潔に紹介する。

第一節　古典的政治史叙述と議会

第二次世界大戦後初期まで、議会に関する研究は、国内政治史のなかで進展していった。しかし、この時期には、議会はのちの時代ほど研究対象として自律しておらず、あくまでいわゆる古典的政治史のなかであつかわれていたにすぎない。たとえば、エルネスト・ラヴィス編『現代フランスの歴史――革命から一九一九年の講和まで――』のうち、シャルル・セニョボスの手になる『第三共和政の変化』（一九二一年）を繙けば、その語りは明確に、「重要な」法制度の制定、レオン・ガンベッタなど「大物」

政治家の思想、「画期をなす」事件、議会の勢力を変更しうる選挙の結果などが中心となっている。こと議会に関しては、現代からみれば事件史的英雄史観にもとづいているという印象をぬぐえない。[1] この著作自体がいわば概説あるいは通史であるとの向きもありえようが、そもそもそれ以外に議会に焦点をあてる叙述をみつけることができないのがこの時期の特徴である。[2]

この時期の個別具体的な研究は、政治的闘争の展開（＝選挙に関する研究）とその主体である政治勢力（＝党派に関する研究）に関心を集中させていた。その背景にはいわゆる第三共和政史観が強く影響していたと考えられ、「反動」を乗り越えて、いかにして共和政が誕生し、定着していったかという問いに強く惹かれていったのである。前者については節をあらためて紹介するとして、ここでは政治勢力に着目した研究の特徴をまとめておきたい。

政治学者ルネ・レモンは、復古王政期から第五共和政までの右派を時期ごとにとらえようと試みた。例をあげれば、七月王政期では正統王朝主義とオルレアニスム、世紀転換期ではナショナリズムなど、その時期を特徴づける勢力に焦点をあて、彼らがどのように力を伸長し、また衰退していったかを時系列に描いている。同時に、党派を一つの集団たらしめるイデオロギー（たとえばオルレアニスムにとっての自由主義など）を分析した。[3] このように、党派や政治勢力は、基本的には政治思想史的に研究されてきたといってよい。[4] フランス革命期のルシャプリエ法（一七九一年）によって禁じられた結社（党派や政党も含まれる）が自由化されるのは、一九〇一年の結社法制定を待たねばならなかった。それゆえ、近代的政党組織が未発達な一九世紀フランスにおいては、「党派」とはきわめて曖昧な存在であり、それゆえに集団を「党派」たらしめるイデオロギーを叙述の中心にすえることで、彼らの輪郭を描こうとしたのである。結果、歴史叙述においては、党派において大きな影響力をもった「著名」な政治家やイデオローグがきわめて重要な位置をしめることになる。

このように、およそ一九七〇年代ごろまで、議会は古典的政治史の枠組みのなかでとらえられてきたといえる。そこでは、「重要」となる事件や法の制定、あるいは「著名」な政治家の活動や思想に焦点をあてた経年的な歴史叙述に重きがおかれてきた。対して、確立された手法にもとづいてきわめて分析的な成果をもたらしていた研究も存在する。次に紹介する選挙研究である。

第二節　選挙研究の展開

この時期の選挙研究は、選挙社会学と選挙地理学という二つの手法を軸に展開した。

アンドレ・シーグフリード『第三共和政における西部フランスの政治的素描』（一九一三年）によって選挙地理学 *géographie électorale*（のちに選挙社会学として位置づけられるようになる）の手法は生みだされた。[5] 以下では、混乱を避けるべく「選挙社会学」の名で統一したい。選挙社会学とは、投票行動には地理的な傾向があるのではないか（それゆえに「地理学」の名を冠する）という疑問から出発し、それを地域の社会構成や経済構造との関連で分析する手法である（そのためにのちに「社会学」とされた）。シーグフリードは、投票と社会・経済構造の連関を通じて「投票の一般法則」を明らかにしようとしたのである。背景には、父ジュールが第三共和政期の下院議員であり、アンドレ自身も数度、それに立候補しては敗退していたという彼の環境や経験も指摘されている。[6] シーグフリードは、ブルターニュとノルマンディを対象に、投票の行使が自由であったか否か、居住状態 *mode de peuplement*（都市か集住か散在か）、宗教（教会）の影響力、国家による干渉のあり方などの諸要素を検討したうえで、各地域の投票結果と関連づけていく。有権者がもつ政治的意見とは、元来、当人が属する社会層や所有形態と密接に連関するが、それが上述した諸要素の組みあわせによって修正され、選挙結果としてあらわれると主張したのである。[7]

選挙社会学は選挙研究に必須の手法となっていった。[8] しかし、一地域の社会・経済構造を明らかにしたうえで投票行動との連関を分析する作業は非常に労が多く、研究対象は広くても数県にとどまり、フランス全体での見取り図を示すことができなかった。こうした問題を部分的に解決するためにあらわれてくるのが選挙地理学であった。

シーグフリードを師とするフランソワ・ゴゲルは、彼の手法を選挙社会学 *sociologie électorale* とあらため、異なるかたちで選挙地理学を発展させた。[9] ゴゲルのいう選挙地理学とは、選挙結果を党派ごとに地図上で色分けすることで世論の動向を地理的かつ視覚的に把握しようとするものであった。一九五一年に刊行された『一八七〇年から一九五一年までのフランスの選挙地理』は、第三共和政以来の下院議員選挙を対象に、選挙ごとに世論の傾向を色分けしたフランス全土の地図を作成、その地理的傾向を示したものである。[10]

ここで紹介した二つの手法は、その起源自体は非常に古いが、それは現代では通用しないということを決して意味しない。たしかに、「投票の一般法則」を追究しはしなくとも、これらは、現在でも各地の投票傾向を把握するために用いられるように、完全に定着したものとして位置づけられる。

さらには、並行して、主として地方史のなかで、各地の政治的変化を時系列に追っていく研究もあらわれる。[11] こうした研究は、選挙社会学と選挙地理学の手法を併用して分析がなされている。

他方で、議会内での政治的闘争に関する研究もなされてきた。選挙研究が選挙区での争いを対象とするのに対し、以下の研究は、選挙によって選出された議員が議会内でいかなる闘争を行ったのかという点に関心を寄せている。「第三共和政憲法」の制定にいたる穏健共和派と中道（とくにオルレアン派）との「妥協」を通じた共和政固持の動きを明らかにしたジャック・グオーの研究や、比較的新しくなるが、改憲問題を中心に議会内の党派関係を分析し、第三共和政を「絶対共和政」と位置づけたオディル・リュデルのものが特筆される。[12] 議会内集団（党派）*groupe parlementaire* については、ドイツ人歴史家ライナー・フーデマンをはじめ、いくつかの研究によって集団の形成や分離、消滅などがつぶさに整理され、第三共和政のとくに初期の議会政治において、こうした集団が果たした役割についても研究されてきた。[13]

第三節　議会制度研究

本章での対象時期において、議会という組織そのものに焦点をあてたものは、同時代であったこともあり、基本的には法制度研究にかぎられる。なかでも同時代人による著作として指摘すべきは、ウジェーヌ・ピエールによる議会制度に関する編纂事業であろう。彼は、下院職員の職務として議会に関するさまざまな「決まり」を記録し、刊行していった。それが『議会法に関する実践的概論』である。[14] 初版は一八七八年に下院議長執務室事務局長ジュール・プドゥラとの連名で刊行された。そして、一八八五年のプドゥラの死後、彼の職を継いだピエールが単独でこの著作の改訂をくり返していく。一八九三年版からは、表題を『政治・選挙・議会法に関する概論』とあらためている。[15]

議会制度に関する著作は、同時代でも決して多くはなく、ピエールの編纂事業のほかには、法学者による議会作業に注目した研究を指摘できる程度である。とくに彼らが目を向けたのが院内委員会制度であった。[16] また、法学・政治学を中心に選挙制度に関する分析・研究も古くから行われてきたことにもふれておく。[17]

この時期の議会に関する研究とは、まずもって法学・政治学の分野で進められてきた。上述のとおり、なかでも選挙研究では現在にまで影響を与えるほどの手法が誕生しているが、全体を通してみれば、「著名」な政治家や「重大」な事件を軸にして歴史を語る古典的な政治史叙述を基本としている。とくに歴史学では、個別の対象としては議会にほとんど関心が払われなかったといっ

てよい。議会は、古典的政治史のなかでしかとらえられず、第三共和政がとくに議会中心的な政体であったこともこうした傾向に拍車をかけた。つまり、議会とは政治家の活動や事件などが展開される「後景」にすぎなかったのである。

① Ernest LAVISSE (dir.), *Histoire de France contemporaine : depuis la Révolution jusqu'à la paix de 1919*, t. 8 (Charles SEIGNOBOS, *L'évolution de la 3e République*), Hachette, Paris, 1921.

② 学界外では、ジャーナリスティックな関心から議会に関する著作（エッセイ）が著されてはいる。後述するアレヴィやテイボデがその代表である。Daniel HALÉVY, *La République des comités, essai d'histoire contemporaine, 1895–1934*, B. Grasset, Paris, 1934. ; André TARDIEU, *La Révolution à refaire*, t. 2 (*La Profession parlementaire*), E. Flammarion, Paris, 1937. ; Roger PRIOURET, *La République des députés*, B. Grasset, Paris, 1959. ; Henry BERGASSE, *Histoire de l'Assemblée, des élections de 1789 aux élections de 1967*, Payot, Paris, 1967.

③ René RÉMOND, *La droite en France, de la première Restauration à la Ve République*, Nouv. éd., Aubier, Paris, 1964.

④ ほかにも以下のような研究がある。Jean-Thomas NORDMANN, *Histoire des Radicaux (1820–1973)*, Ed. de la Table Ronde, Paris, 1974. ; Madeleine REBÉRIOUX, «Le socialisme français de 1871 à 1914», in : Jacques DROZ (dir.), *Histoire générale du socialisme*, Presses universitaires de France, Paris, 1974, pp. 133–236.

⑤ Christian VANDERMOTTEN, «André Siegfried et le *Tableau politique de la France de l'Ouest sous la Troisième République*», in : André SIEGFRIED, *Tableau politique de la France de l'Ouest sous la Troisième République*, Édition de l'Université de Bruxelles, Bruxelles, 2010 (première édition à Paris en 1913), pp. VII-XVII.

⑥ Michel LEYMARIE, «*Les Princes lorrains* et *La République des Professeurs*», in : Albert THIBAUDET, *La République des Professeurs : Suivi de Les Princes lorrains*, Hachette, Paris, 2006 (première édition en 1927), p. 9.

⑦ SIEGFRIED, *op.cit.* ; Id., *Géographie électorale de l'Ardèche : sous la IIIe République*, Armand Colin, Paris, 1949.

⑧ Robert ARAMBOUROU, «Saint-Ferme au temps de la Troisième République : étude de sociologie électorale d'une commune girondine», *Annale du Midi*, 65–22, 1953, pp. 193–204. ; Raymond LONG, *Les élections législatives en Côte-d'Or depuis 1870, essai d'interprétation sociologique*, Armand Colin, Paris, 1958. ; Jacques BASSO, *Les élections législatives dans le département des Alpes-Maritimes de 1860 à 1939 : éléments de sociologie électorale*, Librairie générale de droit et de jurisprudence, Paris, 1968. ; Paul WAGRET, «Attitudes électorales et mentalités religieuses : les populations de la Loire moyenne depuis le milieu du XIXe siècle», *Cahiers de l'Institut d'histoire de la presse et de l'opinion*, 2, 1974, pp. 25–76. ; Bernard MÉNAGER, «Notice sur la sociologie électorale dans la région du Nord», *Bulletin de la Section d'histoire moderne et contemporaine*, 12, 1980, pp. 62–65.

⑨ VANDERMOTTEN, op.cit.

⑩ François GOGUEL, *Géographie des élections françaises de 1870 à 1951*, Armand Colin, Paris, 1951. のちには第四共和政後期も含めた研究も発表している。Id., *Géographie des élections françaises sous la*

Troisième et la Quatrième République, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, Paris, 1970. また、それ以外にも、以下を参照。Jean MASSEPORT, *Le comportement politique du Diois, essai d'interprétation géographique*, Impr. Allier, Grenoble, 1959. ; Id., «Le comportement politique du massif du Diois. Essai d'interprétation géographique», *Revue de géographie alpine*, 48-1, 1960, pp. 5-167.

⑪ Jean MICHEU-PUYOU, *Histoire électorale du département des Basses-Pyrénées sous la IIIe et la IVe République*, Librairie générale de droit et de jurisprudence, Paris, 1965.

⑫ Jacques GOUAULT, *Comment la France est devenue républicaine*, Armand Colin, Paris, 1954. ; Odile RUDELLE, *La république absolue : aux origines de l'instabilité constitutionnelle de la France républicaine, 1870-1889*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1982.

⑬ Rainer HUDEMANN, *Fraktionsbildung im französischen Parlament : Zur Entwicklung des Parteiensystems in der frühen Dritten Republik (1871-1875)*, Artemis Verlag, München, 1979. ; Christoph SCHOBER, „Union-Réunion-Désunion : Der Fraktionsbildungsprozess und das «Loi des Maires» in der «Chambre des Députés» von 1876", *Francia*, 22-3, 1995-1996, pp. 1-22. ; Jean GARRIGUES, «Les groupes parlementaires aux origines de la IIIe République», *Parlement [s], Histoire et politique*, 0, 2003 [en ligne, http://parlements.org/parlements/num0_6_Garrigues.pdf] (二〇二〇年五月八日最終確認). ; Gilles LE BÉGUEC, «Naissance et développement des groupes parlementaires sous la IIIe République», *Parlement [s], Histoire et politique*, 0, 2003 [en ligne, http://parlements.org/parlements/num0_7_LeBeguec.pdf] (二〇二〇年五月八日最終確認).

⑭ Jules POUDRA et Eugène PIERRE, *Traité pratique de droit parlementaire*, Cerf et fils, Versailles, 1878.

⑮ たとえば、一八九三年版については以下を参照。Eugène PIERRE, *Traité de droit politique, électoral et parlementaire*, Librairies-imprimeries réunies, Paris, 1893.

⑯ Joseph BARTHÉLEMY, *Essai sur le travail parlementaire et le système des commissions*, Delagrave, Paris, 1934. ; Robert K. GOOCH, *The French parliamentary committee system*, D. Appleton-Century, New York, 1935. ; Roger BONNARD, *Les règlements des assemblées législatives de la France depuis 1789 : Notices historiques et textes*, Sirey, Paris, 1926. 近年でもいくつかの研究が発表されている。Jean-Marc GUISLIN, *L'Affirmation du parlementarisme au début de la Troisième République : l'exemple du Pas-de-Calais (1871-1875)*, Artois Presses Université, Arras, 2004. ; Hélène LEMESLE, «Apprendre le travail parlementaire et construire la séparation des pouvoirs dans les années 1870», *Revue d'histoire du XIXe siècle*, 35, 2007, pp. 125-139.

⑰ 近年のものとして以下を参照。Alistair COLE and Peter CAMPBELL, *French Electoral Systems and Elections since 1789*, 3rd ed., Gower, Brookfield, 1989. ; Philippe TANCHOUX, *Les procédures électorales en France de la fin de l'Ancien Régime à la Première Guerre Mondiale*, Comité des travaux historiques et scientifiques, Paris, 2004.

第二章　プロソポグラフィの普及とその影響（一九五〇年代〜）

古典的政治史から議会を解放する大きな原動力となったのは、一九五〇年代以降に議員研究に導入され、一九八〇年代から非常に活発となったプロソポグラフィという研究手法の登場であった。集団的伝記とも訳されるプロソポグラフィ（フランス語ではプロゾポグラフィ）は、ある集団に関する史料を網羅的に収集・分析することで集団内の個々人の伝記を描き、それを集合的に分析する手法である。具体的には各人の伝記情報をまとめて集団全体として統計をとることになる。そうすることで、集団全体を一つの主体とした伝記を描写できるのである。[1]

プロソポグラフィは、もとは古代史、とくに古代ローマ史において発達した手法であった。[2] 近現代フランス史においては一九五〇年代ごろからその利用がみられる。膨大な史料を要するこの手法は、基本的に政治・経済・社会的エリート層に適用された。議員もその一つであった。

第一節　先駆的業績としての政治社会学的研究（一九五〇年代〜一九七〇年代）

先駆的研究としてまずあげるべきは、政治学者マッテイ・ドガンによる第三共和政期の国会議員に関する一連の成果である。その先駆けが一九五三年に発表された論考であった。彼は、現在のプロソポグラフィ研究がもっとも関心を寄せる議員集団の社会的側面というよりも、まずは国会議員の人的交替のリズムや任期の長短に着目した。当該期のすべての国会議員の任期について情報を収集・分析した結果として、第三共和政の一つの特質である内閣不安定（議会主義の裏返し）の背後で、国会議員を務める人員の安定性と連続性が共和政の安定を保っていたことを明らかにしたのである。[3] 一九六七年には、現在のプロソポグラフィ研究の直接的基盤となる国会議員の社会的側面を分析した論考を発表した。彼が注目したのは、国会議員の出自と社会層、教育の程度、地方議会議員職の経験、文筆活動、活動員（ミリタン）としての経験、サンディカリスム、議員職の政治的継承といった諸側面であり、第三共和政期の国会議員がいかなる社会集団であったか、その特質について基本的な情報を提供した。[4]

ほかにも、第三共和政期を対象としたものではないが、ルイ・ジラールらによる第二帝政末期の県議会議員に関する研究も重要

である。一八七〇年時の県議会議員を対象としたこの研究（比較のために一八四八年以降も適宜対象としている）は、彼らのリクルートの安定性を指摘する。また、集団の中心を担う名望家（生まれや財産にもとづいて、政治・経済・社会的影響力を行使する者）や貴族の位置を明らかにし、県議会議員たちの政治的傾向や世代交代のあり方がどうであったかという問題についても一つの回答を与えている。第三共和政期との関連でいえば、彼らがその後の政体でいかなる位置をしめていたかについても言及された。[5]

こうした議員の社会的側面への関心は、下院議員の日常生活史研究としてもあらわれた。一九八〇年に刊行された研究書では、選挙戦のあり方、居住や財産などを含む生活様式、議員の一日、その交友関係、パリでの議員としての仕事など、彼らの「日常」について知るための多くの主題があつかわれている。[6]

先駆的業績として位置づけられるこれらの研究は現在でもその価値を失っていない。しかし、第三共和政期の議員研究においてプロソポグラフィという手法が隆盛し、一般的になっていったのは、間違いなく一九八〇年代以降の悉皆調査に負うところが大きい。悉皆調査の動機の一つには先駆的研究がもつ課題の克服も含まれていた。

第二節　一九世紀史研究センターによる悉皆調査

（一九八〇年代半ば～現在）

一九八四年、パリ第一大学と第四大学の共同機関である一九世紀史研究センターを率いるモーリス・アギュロンとジャン＝マリ・マイユールの主導で、第三共和政期の国会議員に関する悉皆調査が企図された。当該期の議員たちが集団としていまだによく知られていないという問題意識がそもそもの動機であった。こうした看過の理由として指摘されているのは、当時の国会議員について知りうるほぼ唯一の刊行史料である議員事典が、印刷史料や議事録など議会史料のみに依拠せざるをえないという史料的制約を抱え、しかもそれらからえられる情報が議員各人で大きく異なり同質性を欠いていることである。そして、上記の先駆的研究は議員事典や議会年鑑などに依拠しており、史料の収集の仕方に問題があると批判する。これをうけて、悉皆調査では質と量を両立させることで正確に第三共和政期の議員集団を描こうと試みたのであった。[7]

調査の指揮をとる一九世紀史研究センターは、情報の均質性を保つべく、大別、次の三つの主題を調査課題として設定した。一つに「政治の社会化 *socialisation politique*」、すなわち国会議員の社会的・家族的出自、彼らがうけた教育、結社への参加、二つ

目に議員の財産や社会的な位置づけ、結婚や家族的結合の側面、最後に政治的キャリアとして、彼らのリクルートのあり方、地方議会での経験や兼任、政治組織での活動、そして議員になるための政治的回路である。[8]

一九世紀史研究センターでは、これと前後してほかにも同様の調査が行われていた。その一つがアギュロンを中心とした、統領政府期から現在（当時）までの市町村長に関する調査である。[9]また、マイユールとアラン・コルバンを中心に、第三共和政期の終身上院議員に関する調査の成果と対象議員の事典も公刊されている。[10]

かくして進められた悉皆調査は現在でも完了していない。しかし、二〇〇三年に「中間報告書」が公表されており、幸いにもわれわれは、網羅性については不完全ながらもその大枠を知ることができる。

中間報告書は以下の三部からなる。第一部では、「議員のプロソポグラフィ」として方法論が定義されたのちに、当時わかっていたかぎりでの議員集団の全体像が描かれ、フランス本土と植民地のうち六地域に関する成果が報告されている。続く第二部「ネットワーク・階梯 *cursus*・表象」は、教育、議員職の家族的継承、議員の財産、議員と実業界との関係、家族・社会・職業ネットワーク・ソシアビリテ、選挙（戦）、上下院間の移動、キャリアの長さ、議会活動（院内委員会など）、表象（議員自身の自己表象と公によるイメージ）をあつかった各章からなる。このうち、選挙や議会活動、表象といった主題は、プロソポグラフィを用いた成果ではなく調査を補完するものとしてくわえられているが、いずれもプロソポグラフィでは明らかにすることが困難あるいは不可能といえるものであり、弱点を補うかたちとなっている。最後に第三部では、ベルギーのリエージュ、イタリア（三本）、イギリス（二本）を対象にヨーロッパ諸国との比較が試みられ、フランスの議員職がしめる位置が考察されている（なお、この部ではプロソポグラフィ研究のもつ危険性を指摘する章もある）。プロソポグラフィでは直接の対象としにくい部分もそれまでの蓄積をもとに補完されているため、議員研究の一つの到達点として評価できる。[11]

この調査は対象を国会議員に限定していた。しかし、プロソポグラフィの普及によって、その余波は地方議会議員にもおよぶこととなった。たとえば、パリ第一大学に提出した博士論文で、長井伸仁は第三共和政前期のパリ市議会議員に関するプロソポグラフィ研究を行い、その成果はフランスで刊行された。[12]また、雑誌『ルヴュ・デュ・ノール』（三〇二号（一九九三年））では「政治

家」の特集が組まれ、ノール＝パ＝ドゥ＝カレ地方の国会議員と県議会議員に関する成果が発表されている。[13]

こうして、政治史に埋めこまれていた議会は、社会史家たちの分析対象となった。それは、同時期の政治文化論に代表されるような、天下国家を論じるにかぎられない「政治的なるもの」への注目、あるいは社会史を経た政治（史）への回帰、すなわち「政治（史）の復権」と軌を一にした動きであったと位置づけられる。[14]

第三節　プロソポグラフィの成果と研究史上の位置

上記の悉皆調査ではきわめて多岐におよぶ知見が与えられた。しかし同時に、未完の事業であり、また地域的多様性も存在する。とはいえ、現時点でもすでにある程度の共通理解はえられている。ここでは、議員という一社会集団を理解するうえでとくに重要と思われる次の三点に着目して、成果を整理しておきたい。

一点目は、議員の社会的変遷に関する成果である。急進派の領袖ガンベッタが、共和政の成立による「新しい社会階層」（商人や教師、職人など、専門職と民衆のあいだの「中間層」）の到来、すなわち支配階層の交替と民主化を予期したことはよく知られる。[15]これが象徴するかのように、かつての歴史叙述は多かれ少なかれ第三共和政の成立と民主主義の到来を等号で結んできた。しかし、プロソポグラフィ研究はいずれも、ほぼ共通して民主化が想定よりも漸進的で緩慢であったことを指摘する。たしかに、たとえば国会議員の出自についていえば、貴族や大ブルジョワジーの家系出身者は時代を下るにつれて大きく減少していく。しかし、職業については、地主など著しい減少をみせるものもあったが、基本的には専門職、とくに弁護士や医師・薬剤師などが中心であった。

ただし、議員職を務める人びとの社会的位置に何の変化もなかったわけではない。国会議員のうけた教育の程度に着目すると、全人口のわずか一％程度しかその恩恵に浴することができなかった時代に、彼らの多く（七五％程度）は高等教育を修了していた。出自と照らしあわせれば、彼らは父よりもいわゆる高学歴となり、それまで重視されてきた経済資本が教育資本に投下されていったことがわかる。いまだ近代的政党が未発達であった当時、議員への回路が限定されていたために、彼らは教育資本を獲得することで社会的上昇を果たしたのである。[16]第三共和政が標榜した「能力主義」を体現する者たちであった。一九世紀フランスのエリート層を研究するクリストフ・シャルルは、統治階層の社会的変化に「名望家モデル」から「能力主義モデル」への漸進的変容をみて、その転機を一八八〇年代とした。[17]議員もこの変化に沿うものであった。

二点目に、プロソポグラフィ研究は「家族（家系）」にとりわけ注目したといえる。国会議員がいかなる家系の女性と結婚した結果、どのような家族的ネットワークが形成されたかといった点も、悉皆調査をはじめこれらの研究が関心を寄せた問いであった。すでに述べたとおり、たしかに議員の社会層は、それまで政治の世界の中心にいた伝統的名望家から、社会的上昇を遂げた人物たちに漸進的にかわっていったが、その動きは緩慢であり、いまだ彼らにとって「家族（家系）」とは重要な要素であった。とくに、婚姻関係などを通じた議員の家系ネットワークは強く残存し、彼らが議席を獲得・保持する過程を理解するにあたって看過しえない視点である。構築された同一の家系ネットワークに複数の議員が含まれ、そのなかで議員職が継がれていく政治的継承関係も存在していた。一点目で確認した変化の緩慢さとあわせて、これらの「前時代的」な要素が残存していたことも、第三共和政期の議員集団の特質をとらえるうえで重要となる。

最後に三点目として、国会議員のキャリアに関して多くを明らかにしてきたことを指摘したい。第三共和政期の国会議員の多くが、その座にいたるまでに地方議会を経験していた。同時に、政治的階梯の存在は複数の議会を兼任する議員を生むことにもつながる。[18] つまり、多くの議員が、ほかの議会に選出されてもそれまでの議員職を辞さないことで、両者が一人の手によって兼任されたのである。[19]

これに関係して、当時の国会議員たちは、ほとんどが議員生活において選挙区を移動しないという点も指摘された。彼らは、一度当選を果たした選挙区（ほとんどが「地元」）から動かず、再選をくり返す。[20] そして、選出以前あるいは以後、「地元」での定着を図るのである。この定着過程の最たるものが、上述した地方議会議員としての地位であった。[21]

プロソポグラフィ研究の成果は多岐にわたり、ここではあくまでその主要なものを指摘するにとどまった。では、この手法は研究史上いかなる意義をもったか、その位置づけを最後に整理しておきたい。

一つ目の大きな変化は、古典的政治史からの議会の解放と社会史への転向であることはいうまでもない。プロソポグラフィは、事件史的政治史に対して議員の社会史を研究の中心にすえた。それにともなって、叙述のあり方も大きく変化した。つまり、経年的に注目すべき事件を軸とする叙述から、プロソポグラフィというきわめて統計的な手法を核とする分析へと様変わりしたのである。しかし同時に、「事件」すなわち政治的変化への注目がやや後景へと退いてしまった感は否めない。社会的側面へと大きく舵

を切りすぎたことで、本来の目的にあった「政治の社会化」は、統治階層の社会的変容という一側面に矮小化されてしまったように思われる。

二つ目に、悉皆調査がきわめて多岐にわたる主題を対象としたことで、議会・議員を多様な角度から分析する土台が提供された。事実、次章で紹介するように、プロソポグラフィの隆盛と並行して、議員研究は多様性を帯びていく。一方で、視野の狭窄もみられるようになり、今後はさまざまな成果を通じていかなる歴史像を映すかが問われるようになるだろう。

三つ目は、議員個人ではなくその集団に着目したことである。従来の政治史的叙述は、ジュール・フェリーやガンベッタといった「著名」な政治家にばかり注目してきた。対して、プロソポグラフィ研究は、集団そのものを対象とするため、「著名」な議員も「平凡」な議員も同じ集団の一構成員としてあつかうことになる。視角の多様化とも相まって、ある主題を分析するための素材として、これまで光をあてられなかった「普通」の議員も舞台の主役に躍り出ることが可能となった。しかし、こうした手法は、反対に議員個々人がもつ影響力などを過度に平均化してしまうきらいがある。容易に数値化できない部分をいかに処理するかは依然として検討の余地があろう。また、数値化がかならずしもつねに有効とはかぎらない。

最後に、これまで主流の研究ではまったく見向きもされなかった地方議会議員にも、研究者の視線が少しずつ注がれるようになった点を指摘できる。エリート集団への関心を増すことになったプロソポグラフィによって、地方史の次元では地方議会議員や市町村長が議論の俎上にのぼった。

一九八〇年代以降本格化していったプロソポグラフィ研究によって、第三共和政の議会に関する研究は大きく進展することになった。これと並行して、議会・議員研究は多様な主題をあつかう時代へと入っていく。

① プロソポグラフィの動向については以下が詳しい。長井伸仁「プロソポグラフィとミクロの社会史――フランス近現代史研究の動向から――」『思想』一〇三二、二〇一〇年、一四三－一五九頁。

② 高橋秀「古代ローマ史プロソポグラフィ研究」『史苑』五〇－一、一九九〇年、一二七－一四八頁。酒嶋恭平「古代ギリシア史研究におけるプロソポグラフィーの効用とその意義」『西洋古代史研究』一八、二〇一八年、五七－七八年。

③ Mattei DOGAN, «La stabilité du personnel parlementaire sous la Troisième République», *Revue française de sciene politique*, 3-2, 1953, pp. 319-348.

④ Mattei DOGAN, «Les filières de la carrière politique en France», *Revue française de sociologie*, 8-4, 1967, pp. 468-492.

⑤ Louis GIRARD, Antoine PROST et Rémi GOSSEZ, *Les conseillers*

généraux en 1870, étude statistique d'un personnel politique, Presses universitaires de France, Paris, 1967. ほかにも以下の研究が特筆される。Jean BÉCARUD, «Noblesse et représentation parlementaire : les députés nobles de 1871 à 1968», *Revue française de science politique*, 23-5, 1973, pp. 972-993. ; Jean ESTÈBE, *Les ministres de la République, 1871-1914*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, Paris, 1982.

⑥ Pierre GUIRAL et Guy THUILLIER, *La vie quotidienne des députés en France de 1871 à 1914*, Hachette, Paris, 1980. 同じシリーズからは、第三共和政末の下院の日常生活史も刊行されている。André GUÉRIN, *La vie quotidienne au Palais-Bourbon à la fin de la Troisième République*, Hachette, Paris, 1978.

⑦ Jean-Marie MAYEUR, «Une enquête sur le personnel parlementaire sous la Troisième République», *Vingtième Siècle, Revue d'histoire*, 11, 1986, pp. 121-123.

⑧ Ibid.

⑨ Maurice AGULHON et al., *Les maires en France du Consulat à nos jours*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1986.

⑩ Jean-Marie MAYEUR et Alain CORBIN (dir.), *Les immortels du Sénat, 1875-1918 : Les cent seize inamovibles de la Troisième République*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1995.

⑪ Jean-Marie MAYEUR, Jean-Pierre CHALINE et Alain CORBIN (dir.), *Les parlementaires de la Troisième République*, Publications de la Sorbonne, Paris, 2003.

⑫ Nobuhito NAGAÏ, *Les conseillers municipaux de Paris sous la Troisième République (1871-1914)*, Publications de la Sorbonne, Paris, 2002. 主たる点については、日本でも発表されている。長井伸仁「第三共和政期のパリ市議会議員（一八七一－一九一四年）」『史林』八二－四、一九九九年、三七－七二頁。同「一九世紀のパリ市議会議員」『帝塚山大学教養学部紀要』五六、一九九九年、三三－五八頁。同「議員とその資産――第三共和政前半期（一八七〇～一九一四年）のパリ市議会議員の事例――」『社会経済史学』六七－六、二〇〇二年、五一－六八頁。

⑬ 特集に含まれるものとして以下の研究がある。Jean-Pierre FLORIN, «Contribution à une histoire des chemins du pouvoir sous la Troisième République : les conseillers généraux du Nord du début du siècle à la veille de la Seconde Guerre Mondiale», *Revue du Nord*, 75-302, 1993, pp. 601-633. ; Régis RENONCOURT, «Les conseillers généraux du Pas-de-Calais de 1871 à 1914», *Revue du Nord*, 75-302, 1993, pp. 635-656. くわえて、以下の研究も参照。Id., «Les conseillers généraux du Pas-de-Calais à la Belle Epoque, 1895-1914», *Revue du Nord*, 72-288, 1990, pp. 1033-1035. 各地の地方議会議員については、主として地方史家によって毎年のように成果が発表されている。代表的なものとして以下を参照。Christophe-Luc ROBIN, *Les hommes politiques du Libournais de Decazes à Luquot : parlementaires, conseillers généraux et d'arrondissement, maires de l'arrondissement de Libourne de 1800 à 1940*, L'Harmattan, Paris, 2007.

⑭ この点については以下を参照。渡辺和行「ポストモダンの社会史と『アナール』」『思想』一〇一二、二〇〇八年、二九－五一頁。

⑮ 「新しい社会階層」については、さしあたり以下を参照。長井、「第三共和政期のパリ市議会議員」、前掲論文、四〇頁。

⑯ Christophe CHARLE, «Les parlementaires, avant-garde ou arrière-garde d'une société en mouvement? : Vue d'ensemble», in : MAYEUR, CHALINE et CORBIN, *op.cit.*, pp. 51-53.

⑰ Christophe CHARLE, *Histoire sociale de la France au XIXe siècle*, Édition du Seuil, Paris, 1991.

⑱ Sylvie GUILLAUME et Bernard LACHAISE, «Essai de synthèse régionale», in : MAYEUR, CHALINE et CORBIN, *op.cit.*, pp. 82–83.

⑲ Guillaume MARREL, *L'élu et son double : Cumul des mandats et construction de l'État républicain en France du milieu du XIXème au milieu du XXème siècle*, Thèse de doctorat, Université Grenoble II, 2003.

⑳ DOGAN, «La stabilité du personnel parlementaire», op.cit., pp. 341–343.

㉑ ただし、選挙区との関係のあり方には地域差が確認される。CHARLE, op.cit., pp. 56–58.

第三章　議会史研究の道へ（一九八〇年代～現在）

本章では、プロソポグラフィ研究と並行して、あるいはその影響のもと展開されてきた潮流をいくつか紹介していく。社会史的な視座の浸透は、同時に研究対象の細分化をもたらした。以下では、とくに関心が集中している特筆すべき課題について整理したい。なお、行論の便宜上、主題ごとに截然と区別しているが、実際には別個に展開しているわけではなく、互いが互いに対して影響を与えている。

第一節　議員の「家系」への着目

前章で述べた悉皆調査は、その元来の目的に、「家族的出自」や「家族的結合」といった項目を設定していた。「家系」への関心がすでに表明されていたのである。その結果、中間報告書においても「家族的継承」や「家系ネットワーク」に関する一章が割かれている。そこでは、家系ネットワークがどのようにして構築され、いかにして議員職が継承されていったかが、調査の過程で明らかとなった具体的事例をもとに説明されていた。家族的継承については、家名にもとづいた「封建的影響力」の重要性を指摘し、家系による領域統治のあり方や議員職を継承するための戦略（家系内での縁故関係の利用や家名と結びつく集合的記憶の組織化など）が紹介される。①

近年では、こうした関心を共有したうえで、それまでの量的な研究に対して質的な方向への深化がみられるようになった。以下、家系ネットワークとそのなかでの議員職の継承に注目する諸研究から、その特質と成果をまとめておきたい。

家系ネットワークを重視する研究は、いずれもその広がりと影響力（どの程度の数の議員がそこから輩出したか）を強調する。そして、その核はいわゆる「婚姻政策」であった。同一家系に複数の議員が含まれるようになり、またそこから多くの議員が輩出

するのは、これに負うところが大きい。[2] また、家系ネットワークとはやや離れるが、より広い縁故関係 *clientélisme* に注目する研究もある。普通選挙の社会史研究で知られるアラン・ガリグは、名望家社会と結びつけられがちな縁故関係にもとづく投票が第三共和政期にも批判の対象となりつつ存続していたことを指摘する。[3] いずれにせよ、「家系」や「縁故」といった視角が近年ではつとに重視されている。

さて、これらと深く関係するのが家系内での議員職の継承である。「家族的継承」とも呼ばれる実践によって同一家系内で議員職がうけ継がれ、またその数を増やすことになるのである。こうした関心をもっとも顕著に示すものが、一九九二年に刊行された議員職の継承に関する論文集であろう。[4] 第三共和政前期に関しては、特定家系が国政や地域政治、あるいは経済界との密接な関係を築くとともに、議員職の兼任や家系にまつわる集合的記憶の組織化などを通じて地域に定着し、同一家系内で議員職を継承することができた点が強調される。[5] ただし、この論文集では政治的継承を強調するのみならず、元来それに親和的であった伝統的名望家が徐々に時代の変化に順応しようと奮闘する姿をも描いている点にも注意を払いたい。[6]

いずれの研究も、当時の議員たちにとって「婚姻政策」を通じた家系ネットワークがいかに重要であったかを強調する。とくに地方議会の次元ではかなり密に構築されている地域もあった。そして、家系ネットワークのなかで議員職が継承されていくのである。息子や甥が父や伯父（叔父）の議員職を継承して、いわゆる「二世議員」となっていく。すでに述べたように、第三共和政の到来と支配階層の交替を等号で結ぶ見方には、プロソポグラフィ研究によって疑義が呈されてきた。「家系」に着目する研究もこの潮流に位置し、かつての名望家社会がそうであったように、なおも政治的エリートにとって「家系」の存在が無視しえないことを強調するのである。

第二節　議員の経歴に関する研究

プロソポグラフィ研究は、議員個々人（集団）の伝記的情報を収集することをその第一の目的あるいは手法としていた。そのため、どういった家庭に生まれたか、いかなる教育をうけたか、その職業は何であったか、いかにして政界に入ったか、地方議会議員職を経験していたかといった、議員の人生の各転機に自ずと注目することとなる。いわば議員の来し方に注目する研究ともいえる。並行して、近年では議員の経歴に着目する研究もいくつかみられるようになった。それらは、とくに職業や政界入りの回路に

関心を寄せている。

議員の職業については、すでにプロソポグラフィ研究によって当時の議員の中核が専門職（知的ブルジョワジー、とくに弁護士などの法曹関係者や医師・薬剤師、文筆家・ジャーナリスト）によって構成されていたことが明らかとなっている。以降、中核をなすこれらの職業議員を通じて、専門職と議員の関係を質的に分析しようとする研究が興隆するようになった。

ただし、こうした視点自体は、実は古くから存在していた。それが第三共和政後期の文筆家アルベール・ティボデによる「大学教員たちの共和国」であった。一九二〇年代の左翼カルテルの躍進という政治状況に相対した彼は、エドゥアール・エリオをはじめ大学教員とくに高等師範学校の卒業生がカルテルに多く含まれていたことから、「大学教員たちの共和国」が到来したとみたのである。[7] ただし、実際にはすでに政治家として活躍していた者がほとんどであり、彼らは大学教員としての実態をもたなかった。さらに、印象的ではあったとしても、実数としてはそう多くはなかったことがすでに指摘されている。[8]

その成否についてはさておき、これにならって、議員に特徴的な職業に焦点をあてる研究が近年になって生まれてきた。とくに、利害代表の観点から職業（界）と議員との関係を問うものが、技師や医師、広く経済ブルジョワジーなどいくつかあらわれている。[9] とくに、経済ブルジョワジー議員に注目したジャン・ガリーグの研究は、第三共和政の成立において彼らを中心とした中道左派が果たした役割を強調することで、自由主義共和国の形成という第三共和政の政治を理解するのにきわめて重要な論点を提示した。[10]

以上の研究は、多かれ少なかれ職業議員が第三共和政の政治・政策においていかなる位置をしめたかを検討してきたといえる。しかし、議員の経歴という観点からみてもっとも注目すべき視線が「弁護士たちの共和国」である。

弁護士は第三共和政期の議員にもっとも多い職業であった。二〇〇三年に刊行されたジル・ル・ベゲックの著書は、第三共和政期から二〇世紀半ばにかけての「弁護士たちの共和国」の隆盛と衰退を描いている。第三共和政期に旧支配層が排除されることによって形成された「弁護士たちの共和国」は、議員・政治家を形成（養成）するための確立されたネットワークに支えられていた。所属する弁護士会や弁論会議・コンクールを通じて、弁護士たちは、議員職に必要な弁論技術を磨くのみならず、横のつながりや先達たちとの関係を結ぶことでソシアビリテや政界入りの回路を確立していた。そして、彼らの政界進出が、なおいっそう法曹界と政界とを強く結びつけていくのである。[11]

その最大の特徴は、ほかとは異なり、政界進出のための特殊な実践やネットワークが弁護士間で構築・共有されていたと強調する点にある。つまり、彼らは単に結果として議員に多い職業であったのではなく、政界への道を構築し、またそれが構築されていたがゆえに、類まれな存在感を発揮していたのである。実際、ル・ベゲックは「技師たちの共和国」や「大学教員たちの共和国」と「弁護士たちの共和国」がまったく異なることを強調し、前者の見方に批判を投げかける[12]。弁護士という職業は、ほぼ唯一、議員になるための職業という側面をもつものとして理解され、議員の経歴のなかに適切に組みこまれるのである。

では、こうした職業を経た彼らは、どのようにして政界に入っていったのか。近年ではこの問いにも目が向けられている。とくに「弁護士たちの共和国」論では政界入りの回路が注目されていた。同じくル・ベゲックは、別の論考において、広く近現代フランスを対象とした政治家の養成回路（「政治の学校」と彼は呼ぶ）として、結社や機関、そしてとくに雄弁さが求められる議員にとっては議論するための団体「パルロット *parlottes*」が重要であったと指摘する[13]。また、近年では、議員個人に焦点をあてた質的研究も進められている[14]。

本節で紹介した研究は、議員のキャリアに関心を寄せるものとまとめることができる。彼らは職業上のネットワークや結社、組織での経験などをふまえたうえで議員となっていたのである。

第三節　議員と選挙区の関係

前節の諸研究が議員の来し方に注目するものであるならば、議員になってから彼らが選挙区でいかなる活動を行っていたかに関心を寄せる研究もあらわれてきた。とくに普通選挙の時代である第三共和政期においては、議員あるいは党派がいかにして選挙区に定着し、再選をくり返していったかが大きな争点となる。

地域的定着と再選に関する研究は、そのために議員たちがいかなる実践を行ったかを最大の関心事としている。既述の「家系ネットワーク」もその一つである。たとえば、パ＝ドゥ＝カレ県のある大名望家を事例とした研究は、「地元」で県議会議長職を非常に長期にわたって務めていたことを定着の要として強調する。くわえて、家系や「生まれもった」名望家のネットワーク、そして共和派議員として重要であった教師を通じたネットワークによって「選挙地盤」を形成し、再選をくり返していくようになるのである。のみならず、有権者とも集会や宴会（バンケ）を通じて頻繁に接触をはかり、国会で彼らの利害を積極的に擁護することも忘れなかった[15]。

地域的定着のための実践としては、およそ地方議会議員職の重要性と兼任[16]、家系ネットワークをはじめとする複数の紐帯、有権者との密な関係の構築などがあげられる。近代的政党が未発達であった第三共和政期においては、党派（集団）による実践ではなく、あくまで個人的な実践が重要であった。こうした第三共和政の歴史的特殊性を強調するのが、二〇一四年に刊行された近現代フランスにおける議員と選挙区との関係に関する論文集であった[17]。

一七五〇年から二一世紀初頭までを対象とするこの論集では、議員と地域的定着のあり方を長期的に観察するために、選挙区を議員あるいは党派からみて「選挙地盤 *fiefs*」、「牙城 *bastions*」、「布教の土地 *terre de mission*」、「選挙空白地 *déserts électoraux*」に分類したうえで議論を進めていく。第三共和政期は個人的な「選挙地盤」の時代であった。近代的政党が未発達であるがゆえに、議員たちは個人で地域的定着を図り、「選挙地盤」を構築していく。そして、こうした「選挙地盤」の形成は、最終的に地域内での権力の個人化へと帰着していったのである。

第三共和政期の議員は、地方議会議員職の獲得や「地元」での家系やその他のネットワーク、ソシアビリテの構築などを通じて、党派的にではなくあくまで個人として「選挙地盤」を構築し、「地元」から再選をくり返していたのである。

第四節　選挙の社会史的研究と党派・政党に関する研究

きわめて広い主題をあつかったプロソポグラフィ研究でも、残した課題は存在する。それが選挙と政治組織の分析である。とくに前者については、悉皆調査を主導したマイユール自身もそれを認めている[18]。しかし、議員に対する社会史的関心は、選挙や政治組織の研究にも変化をもたらした。

第一章で確認した「古典的」な選挙研究の関心事は選挙結果の解釈にあった。世論を反映し、また議会構成に直接の影響を与える選挙結果を重視するのは当然の帰結であろう。一方で、それがいかなる過程を経てあらわれていたかという観点は希薄であった。すなわち、結果に影響をおよぼしうるはずの選挙実践はこれまで看過されてきたのである。

しかし、一九八〇年代ごろから選挙研究でも社会史的な関心がみられるようになる。すでに本章で紹介したほかの潮流でも、選挙の実践に着目するものが多くなってきた。そもそも「家系ネットワーク」や地域的定着といった側面が重視されたのは、それが議員として選出されるための手法の一つであったからにほかならない。とくに、後述する「政治の専門職化」論は、一九世紀における選挙実践の変容を議論の核にすえている。こうした潮流からも、結果の解釈から実践への注目へと関心が移行していったこと

がわかる。

それをもっとも象徴する成果は、一九九一年に上梓されたレイモン・ユアールによる著作であろう。近現代フランスにおける普通選挙の通史であり、その法制度の変化などをあつかうこの本は、一部をそれまでに明らかにされてきた選挙実践の紹介にあてているのである。[19] また、ガリグによる二〇〇二年の単著は、社会における選挙、すなわち選挙の社会的側面への注目をうながし、現代世界の投票率の低さ（棄権主義 *abstentionnisme*）にいたる「民主主義の民主主義的歴史」（有権者を主体とする選挙の歴史）を描いた。[20] これ以外にも、近年では有権者による選挙実践に注目が集まっている。[21] これらの研究は、従来の「どのような結果が示されたか」から「どのようにしてそうした結果が示されたか」に関心を移しているといえる。

また、類似の動きは党派・政党に関する研究でもみられる。すでに述べたように、第三共和政期の党派や政党は、近代的な組織政党ではなくきわめて曖昧とした集団であった。それゆえに、古典的政治史の時代における研究は、まずその根幹をなすイデオロギーに着目し、そのうえで「党派」としてとらえられる勢力の伸長や衰退を分析の対象としたのである。

対して一九八〇年代以降、近代的政党へといたる道を明らかにすることを最大の関心事とし、その組織形態に焦点をあてるようになった。当然、かつてのような関心をまとった視線も軽視されてはいない。たとえば、一九九一年に刊行されたオポルチュニストに関する論集では、その思想や政策が検討されている。[22] また、「オポルチュニストの共和国」の形成過程を明らかにするジェローム・グレヴィの研究書でも、彼らがいかにして勢力を広げていったか、その政治史的展開が描かれている。[23] たしかに党派の思想や政策、政治的展開を追う点では以前の研究とそうかわらないが、しかし、これらの研究は、同時にそのネットワークや選挙活動などにも目配りをしているのである。

党派を社会的側面からとらえる先駆的研究の一つが、またもユアールの著作（一九八二年）であった。一八四八年から一八八一年までの低地ラングドック地方（とくにガール県）における「共和派」の運動をとりあげた彼は、ナショナルとローカルな政治的展開のなかで「共和派」がどのように変容したかを、その組織面から詳細に追っている。境界のはっきりしない「共和派」が、いくつもの集団・結社から組織化されていく過程を描き、「政党の前史」を叙述したのである。[24]

こうした姿勢は、一九〇一年の結社法制定以降の時代を対象とする政党研究にうけ継がれていく。たとえば、ローヌ県共和派連

合を対象とした研究では、前身となるネットワークのあり方や組織化の動きに注目したのちに、一九〇〇年代に中央で共和派連合が形成されたことをうけて、ローヌ県で同組織が構築されていく過程が明らかにされた[25]。また、ロズモンド・サンソンも、全国組織である民主共和連盟 *L'Alliance républicaine démocratique* が、いかにして各地の既存の後援会とネットワークを結んで組織化していったかを描いている[26]。

もっとも浩瀚な党派研究としては、一九九二年にジャン＝フランソワ・シリネッリを編者として刊行された「右派」に関する研究書があげられる。右派のイデオロギーやその政治史を語る第一巻、右派の組織やプロパガンダなどをあつかう第二巻、そして彼らの行動様式に注目する第三巻と、その構成からも党派に対する社会史的・文化史的関心は明瞭だろう[27]。

近年の党派・政党研究は、「近代的政党への道」という観点からその組織形態に着目してきたといえる。こうした歴史を、法制度や議論の変化とそれによって変容する政治組織のあり方から通読したものが、ユアールによる一九九六年の成果であった。中間団体を否定したフランス革命期から一九〇一年の結社法にいたる時期を対象に、近代的政党が生みだされていくまでの歴史を描いたのである[28]。

第五節　「名望家の終焉」再考——政治の専門職化——

ここまで近年の研究にみられる大きな潮流を整理してきた。そこには、ある一つの大きな見方が通底していることがわかるだろう。それは、いずれの潮流も、「家系」や縁故関係、それらにもとづいた家系内での政治的継承や個人による地域的定着などといった、共和政の成立による民主主義社会の到来という歴史像とは相いれない、いわば「前時代的」要素の残存を強調する視線である。ある研究者は、共和政のデモクラシーはその理想とは真逆の実践を免れなかったと印象的にまとめている[29]。この先に行きつく議論が「政治の専門職化」論である。

「政治の専門職化」論を理解するには、まずは「名望家の終焉」について説明しなければならない。第三共和政後期の文筆家ダニエル・アレヴィは、共和政の成立とともに「名望家の終焉」が訪れたと述べた。ナポレオン期以降、近代フランスの名望家社会は、一八四八年の男子普通選挙制の導入によって大きく動揺する。有権者数の爆発的増加をまえに、政治・社会・経済的影響力にもとづく名望家支配という「古い」手法が徐々に時代にそぐわなくなり、他方で、普通選挙の普及によって、第三共和政の成立とともに、それまで政治の世界から排除されていた社会層へと支配階層が劇的に交替したと分析したのである[30]。これが「名望家の

終焉」であり、新しい社会層たちは、普通選挙の時代に合致した「政治の専門家（職業政治家）」として君臨する。まさに、マックス・ヴェーバーの「名望家」論と「職業としての政治」の議論と同じ系譜ととらえることができよう。[31]

しかし、すでにみてきたように、近年の研究はいずれも、多少なり「名望家の終焉」論を再考する方向に議論を進めていった。「名望家の終焉」と象徴的にとらえられるほどの急激な議員の社会層の変化は生じず、民主化は漸進的であったことが数量的に示され、「前時代的」あるいは名望家社会的な要素の残存も強調されている。こうした「名望家の終焉」を再考するなかであらわれてきたのが、近年の「政治の専門職化」の議論である。

男子普通選挙の導入や、一九世紀後半の都市化や識字率の向上、教育の普及といった変容のなかで、選挙活動や議会活動などが近代化・合理化されていく。そして、およそ第三共和政期に政治を「職業 *métier*」とする「政治の専門家」が登場するようになった。これが「政治の専門職化」としてとらえられる実践面の変化である。[32]

しかし、この議論の本質は、議会政治にかかわる諸実践の近代化や合理化という範囲にとどまらず、名望家による「政治の専門職化」を強調する点にある。「名望家の終焉」論では、旧時代の名望家から、「専門職化」したより下位の社会層へと劇的に支配層が「交替」したと主張されていたが、近年の「政治の専門職化」の議論は、この変化を統治層の急激な「交替」とはとらえない。具体的には、従来の見方が強調する新しい階層の「専門職化」よりも、旧支配層と考えられてきた伝統的名望家による「専門職化」への順応にこそ注目するのである。[33] たとえば、社交と密接に結びついた政治生活を送っていた名望家は、弁論団体や文筆活動などすでに述べたような普通選挙の時代が要請する選挙実践に徐々に適応する、あるいは適応しようと努めていた。[34]

「政治の専門職化」の具体例として頻繁に引きあいに出されるのが、エリック・フェリポが光をあてたアルマン・ドゥ・マコーである。ドゥ・マコーは、オルヌ県の県議会議員、下院議員として実に約六〇年（一八六六年から一九一八年まで）も議員職を務めた人物である。名望家として議員を務めていた彼も、第三共和政期に入り、普通選挙が普及・定着していくにつれ、名望家としての影響力のみでは票を集めることができなくなっていく。そうしたなかで彼は、それまでの経済・社会資本にものをいわせたやり方から、社会資本をもたざる者たちが政治組織（集団）によって戦うように、徐々に「選挙事業 *entreprise électorale*」（選挙代理人 *agents électoraux* の雇用や選挙チーム *équipe électorale* の形

成）を行い、選挙活動を合理化・専門化していくことで対抗していった。伝統的名望家の位置に甘んじることなく、普通選挙の時代に順応し、組織化をはじめとする選挙における動員のノウハウを身につけ、政治活動を合理化させていったのである。同時に、つねに職を失う危険をともなう彼らは、地方議会議員職を獲得・兼任することで地盤を固め、また新聞などによるプロパガンダを行い、政治組織を形成するようになる。こうして、社交（社会的関係）のなかに埋もれていた政治空間が自律し、政治によって生活する「政治の専門家」が誕生していったのである。[35]

このように、近年の「政治の専門職化」論は、「名望家の終焉」論の主役であった低い社会層の「専門職化」ではなく、旧統治層とみなされてきた名望家による「専門職化」への順応を強調する。[36] 断絶よりも連続に注目しているのである。しかし、名望家側にばかり注目するためにあまり意識されているとは思われないが、それは前者の「専門職化」を否定するものではなく、あくまでそうした変化を前提としなければならないことに注意すべきだろう。つまり、「政治の専門職化」とは、従来のような旧支配層である名望家から新支配層である「政治の専門家」への「交替」ではなく、また名望家社会の単なる「継続」でもなく、名望家とより低い社会層の両者から「政治の専門家」へと「再編」されていく社会的な過程としてとらえなければならない。実際に、近年では、第四共和政期が主となるが、「政治の専門家」の再名望家化 re-notabilisation という議論もみられる。[37]「政治の専門家」が、長期にわたる議員職の保持を行い、それにもとづいて政治・社会・経済的影響力を行使すると主張されているのである。「政治の専門職化」とは、単なる議会政治、とくに選挙に関わる実践の近代化にとどまらず、長期にわたる新たな議員階層の再編過程であった。

① Bernard MÉNAGER, «La succession des mandats : une affaire de famille?», in : MAYEUR, CHALINE et CORBIN, *op.cit.*, pp. 197–210.

② Christophe-Luc ROBIN, «Le personnel politique à Libourne au XIXe siècle : réseaux familiaux et pouvoir local», in : René PLESSIX et Jean-Pierre POUSSOU (dir.), *Les petites villes françaises du XVIIIe au XXe siècle*, Société d'histoire des petites villes, Mamers, 1998, pp. 393–402. ; Rémy CAZALS, ««Reille père et fils, société pour l'exploitation du mandat de député», Les barons Reille et le pouvoir (1861–1958)», in : Michel BERTRAND (dir.), *Pouvoirs des familles, familles de pouvoir*, CNRS-Université de Toulouse-Le Mirail, Toulouse, 2005, pp. 297–306.

③ Alain GARRIGOU, «Clientélisme et vote sous la IIIe République», in : Jean-Louis BRIQUET et Frédéric SAWICKI (dir.), *Le clientélisme politique dans les sociétés contemporaines*, Presses universitaires de France, Paris, 1998, pp. 39–74.

④ Claude PATRIAT et Jean-Luc PARODI (dir.), *L'hérédité en politique*, Économica, Paris, 1992. 類似の関心を示す研究として以下を参照。

Paul BAQUIAST, *Une dynastie de la bourgeoisie républicaine : Les Pelletan*, L'Harmattan, Paris, 1996.

⑤ たとえば、以下の論考を参照。Bernard MÉNAGER, «Typologie de dynasties parlementaires : les dynasties parlementaires dans le Nord-Pas-de-Calais dans la seconde moitié du XIXe siècle et la première moitié du XXe», in : *Ibid*., pp. 123–140. ; Jean-Louis BRIQUET, «Une histoire de famille : La gestion familiale d'un patrimoine politique. Le cas d'une famille de notables corses, les Gavini (1850–1962)», in : *Ibid*., pp. 155–169.

⑥ Renaud DORANDEU, «Se faire un nom : de la tradition familiale à la modernisation de l'entreprise politique», in : *Ibid*., pp. 109–122.

⑦ THIBAUDET, *op.cit*., p. 9.

⑧ LEYMARIE, op.cit., pp. 17–18.

⑨ Bruno MARNOT, *Les Ingénieurs au Parlement sous la IIIe République*, CNRS Éditions, Paris, 2000. ; Isabelle CAVÉ, *Les médecins-législateurs et le mouvement hygiéniste sous la Troisième République, 1870–1914*, L'Harmattan, Paris, 2014.

⑩ Jean GARRIGUES, *La République des hommes d'affaires, 1870–1900*, Aubier, Paris, 1997.

⑪ Gilles LE BÉGUEC, *La république des avocats*, Armand Colin, Paris, 2003.

⑫ Gilles LE BÉGUEC, «Les réseaux», in : MAYEUR, CHALINE et CORBIN, *op.cit*., pp. 244–246.

⑬ Gilles LE BÉGUEC, «Les circuits de formation du personnel politique», in : Serge BERSTEIN et Pierre MILZA (dir.), *Axes et méthodes de l'histoire politique*, Presses universitaires de France, Paris, 1998, pp. 303–318.

⑭ 一例として以下を参照。Michel SALVIAC, «L'entrée en politique de Raymond Poincaré (1886–1889)», in : Jean LANHER et Noëlle CAZIN (dir.), *Raymond Poincaré, un homme d'Etat lorrain, 1860–1934*, Société des lettres, sciences et arts de Bar-le-Duc, Bar-le-Duc, 1989, pp. 21–37.

⑮ Jean VAVASSEUR-DESPERRIERS, «L'implantation locale d'un grand notable du Pas-de-Calais, Charles-Célestin Jonnart (1857–1927)», *Revue du Nord*, 72–288, 1990, pp. 907–927.

⑯ とくに以下では社会主義の定着における兼任の役割が強調される。Jacques GIRAULT (dir.), *L'implantation du socialisme en France au XXe siècle : partis, réseaux, mobilisation*, Publications de la Sorbonne, Paris, 2001.

⑰ François DUBASQUE et Éric KOCHER-MARBŒUF (dir.), *Terres d'élections : les dynamiques de l'ancrage politique, 1750–2009*, Presses universitaires de Rennes, Rennes, 2014.

⑱ MAYEUR, «Origines et démarche», op.cit., p. 24.

⑲ Raymond HUARD, *Le Suffrage universel en France : 1848–1946*, Aubier, Paris, 1991.

⑳ Alain GARRIGOU, *Histoire sociale du suffrage universel en France : 1848–2000*, Éditions du Seuil, Paris, 2002.

㉑ Yve DÉLOYE et Olivier IHL, «Des voix pas comme les autres. Votes blancs et votes nuls aux élections législatives de 1881», *Revue française de science politique*, 41–2, 1991, pp. 141–170. ; Michel OFFERLÉ, «L'électeur et ses papiers. Enquête sur les cartes et les listes électorales (1848–1939)», *Genèses*, 13, 1993, pp. 29–53.

㉒ Léo HAMON (dir.), *Les Opportunistes : les débuts de la République aux républicains*, Éditions de la Maison des sciences de l'homme,

Paris, 1991.

㉓ Jérôme GRÉVY, *La République des opportunistes, 1870-1885*, Perrin, Paris, 1998.

㉔ Raymond HUARD, *Le mouvement républicain en Bas-Languedoc, 1848-1881 : la préhistoire des partis*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, Paris, 1982.

㉕ Mathias BERNARD, *La Dérive des modérés : La Fédération républicaine du Rhône sous la Troisième République*, L'Harmattan, Paris, 1998.

㉖ Rosemonde SANSON, *L'Alliance républicaine démocratique : Une formation de centre (1901-1920)*, Presses universitaires de Rennes, Rennes, 2003.

㉗ Jean-François SIRINELLI (dir.), *Histoire des droites en France*, 3 vols., Gallimard, Paris, 1992.

㉘ Raymond HUARD, *La Naissance du parti politique en France*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, Paris, 1996.

㉙ VAVASSEUR-DESPERRIERS, op.cit., p. 927.

㉚ Daniel HALÉVY, *La fin des notables*, Grasset, Paris, 1930.

㉛ マックス・ウェーバー（世良晃志郎訳）『支配の社会学』Ⅰ・Ⅱ、創文社、一九六〇年（原著刊行一九五六年）。同（世良晃志郎訳）『支配の諸類型』創文社、一九七〇年（原著刊行一九五六年）。マックス・ヴェーバー（脇圭平訳）『職業としての政治』岩波書店、一九八〇年（原著刊行一九二一年）。

㉜ Yves BILLARD, *Le métier de la politique sous la IIIe République*, Presses universitaires de Perpignan, Perpignan, 2003.

㉝ Michel OFFERLÉ (dir.), *La profession politique XIXe-XXe siècle*, Belin, Paris, 1999. なお同書は、表題と内容を若干あらため、のちに再版されている。Id. (dir.), *La profession politique XIXe-XXIe siècle*, Belin, Paris, 2017.

㉞ Jean JOANA, *Pratiques politiques des députés français au XIXe siècle : du dilettante au spécialiste*, L'Harmattan, Paris, 1999.

㉟ Éric PHÉLIPPEAU, *L'invention de l'homme politique moderne : de Mackau, l'Orne et la République*, Belin, Paris, 2002.

㊱ 第三共和政前期の名望家は、一般に右派と強く結びつき、左に行くほどその割合は減少していく。ただし、近年の名望家に注目する研究では、かならずしも右派名望家のみに焦点があてられているわけではない。

㊲ Noëlline CASTAGNEZ, «La notabilisation du PS-SFIO sous la Quatrième République», *Vingtième Siècle, Revue d'histoire*, 96, 2007, pp. 35-46. また、この問題については以下の雑誌でも特集された。とくに次を参照。Laurent GODMER, «Les élus régionaux : un personnel politique entre notabilisation, dénotabilisation et renotabilisation», *Histoire@Politique*, 25, 2015 [en ligne, https://www.histoire-politique.fr/documents/25/dossier/pdf/HP25_Dossier_Laurent_Godmer_DEF.pdf]（二〇二〇年五月八日最終確認）.；Aude CHAMOUARD, «Existe-t-il des notables socialistes sous la Troisième République», *Histoire@Politique*, 25, 2015 [en ligne, https://www.histoire-politique.fr/documents/25/dossier/pdf/HP25_DossierNotables_Aude_Chamouard_def.pdf]（二〇二〇年五月八日最終確認）. 第三共和政期の議員職の兼任について研究したマレルは、その後期において、社会主義派が兼任を通じて再名望家化したと述べ、この議論を第三共和政期に適用している。MARREL, *op.cit.*, pp. 245-297.

第四章　「議会史」の誕生

プロソポグラフィの登場とそれに並行する社会史的関心の高まりから、当時の議員たちがいかなる存在であったかが、質・量ともに精力的に明らかにされてきた。さらに追い風となったのが、二一世紀に入ってからの学界内での動きであった。

それが「議会史・政治史協会」の誕生（二〇〇二年）である。国会の後援をえたこの協会は、フランスおよび国際的な政治生活に関する研究の推奨と公に対する議会活動の理解促進を目的とする学術団体である。会長は、政治史研究で知られるオルレアン大学のガリーグである。ヨーロッパ各国の議会史に関する研究団体が参加する「議会史に関する情報および研究のヨーロッパネットワーク」にも参加している。[1]

こうして二一世紀になって、議会史をその主目的にすえる学術協会がフランスではじめて設立されたのである。これまで社会史家によって担われてきたプロソポグラフィ研究は、議員たちの政治的側面を図らずも希薄化させてしまった。しかし、政治史家を中心にふたたび組織化されることで、議会史研究は、社会史の成果をふまえた議会政治の理解へとようやく歩みはじめたといえる。

さらには、この協会によってフランス最初の議会史専門雑誌が創刊された。二〇〇三年発刊の雑誌『議会――政治史雑誌――』（二〇〇六年六月号まで副題は「歴史と政治」）は、年二回発行されている（大半の年で増刊号として三回刊行されている）。かならずしも狭義の議会史のみではなく広く政治史をあつかう雑誌であり、その対象もフランスに限定されない。

そして、議会史研究の一つの到達点として、二〇〇七年には協会長のガリーグを中心にフランス議会史の通史が編まれた。アンシァン・レジーム期（三部会）から現代にいたるまでの「議会 *Parlement*」の歴史を跡づけるこの著作は、基本的には事件史的な政治史叙述を軸としている。しかし、最大の特徴として、こうした経年的な叙述のなかで、同時に議員の社会的・文化的側面にも配慮されている。[2] また、二〇一三年には、ジャン・エル・ガマルによってフランスの議会主義アイデンティティ *identité parlementaire* を軸とした概説的通史も著された。革命期から現在までの期間を対象に、政治史の大きな展開を追いながら、それにともなう議会主義アイデンティティの盛衰を検討したこの著作も、議員の社会的側面や彼らと有権者ひいては社会との関係にふれている。[3] プロソポグラフィとそれ以降の研究をふまえた通史が登場したのである。

① 「議会史・政治史協会」については、同協会のウェブサイトによる紹介を参考にした。http://www.parlements.org/presentationCHPP.html（二〇二〇年五月八日最終確認）。

② Jean GARRIGUES (dir.), *Histoire du parlement de 1789 à nos jours*, Armand Colin, Paris, 2007.

③ Jean EL GAMMAL, *Être parlementaire de la Révolution à nos jours*, Armand Colin, Paris, 2013.

おわりに

長らく伝統的政治史の「後景」にすぎなかった議会は、社会史・文化史的研究を通じてようやくひとつの研究対象としてあらわれてきた。この動きは、近年では議会史という古くて新しい領域として確立しつつある。しかし、当然ながら現状に対して課題がないわけではない。以下では、現在の議会史研究が抱える諸問題を指摘して結びとしたい。

一つ目に、議員の社会的側面へと過度に注目が集まっている点を指摘しなければならない。プロソポグラフィによって、研究の比重は古典的政治史から社会史へと移行した。これ以降の研究は、その影響を免れることはできず、並行してあるいはその成果を継承して、とくに質的に議員の社会的あるいは文化的側面に着目してきた。いうまでもなく、もはや議会史研究において社会史・文化史的視点は欠かすことができない。しかし、プロソポグラフィ研究の隆盛と裏腹に（あるいはそれゆえに）、本来の課題であったはずの「政治の社会化」という視点は希薄化してしまっている。もちろん、「政治の専門職化」論が明らかにする議員階層の再編成といったテーマが、まるで政治的な主題でないというつもりは毛頭ない。しかし、不思議なことに、議員の社会的側面に関する研究の盛りあがりの裏で、彼らが基本的な活動の場とする議会あるいはそこで展開される議会政治には、ほとんど目が向けられなくなってしまった①。今後は、議員の社会的変容が、いかにして議会政治に影響を与えたか（逆もまた然り）を問う必要があろう。議員の社会的構成や変容をふまえた議会政治の政治・社会・文化的な構造把握が求められる。

二つ目に、「議会史 *histoire parlementaire*」を再定義する必要があると考えられる。議会史とはいうまでもなく「議会の歴史」であるが、ここで想定されるのは「国会 *Parlements*」である。字義どおりにとらえれば、自ずと地方議会は「議会史」の視野の外におかれてしまう。しかし、議員の社会的側面や「政治の専門職化」論に関する研究にかんがみれば、議員たちの経歴における地方議会での経験は決して無視できない。果たして地方議会を排除したかたちで、第三共和政期の「議会政治」を十全にとらえる

ことができるだろうか。ここに「議会史」の限界がある。

たしかに、これは半ば「言葉遊び」であり、広義の「議会史」には地方議会も含まれうるという返答も想定される。しかし、にもかかわらず、現状では明らかに「議会史」から地方議会は排除されている。その大きな理由は、地方議会 *conseils locaux* が基本的に行政機関であり、これまでの研究者もそのようにとらえて行政史研究の枠組みのなかでこれをあつかってきたことにある。本稿でも紹介したように、従来の「議会史」の枠内でも、わずかながら地方議会には目を向けられてきた。しかし、それはあくまで国会議員が輩出する、あるいは兼任するという関心に規定されたものであった。今後は、地方議会の側から、国会も含めた議会共和政の理解に取り組む必要がある。地方議会は、第三共和政期の「議会政治」に位置づけられうるのか、そうであればいかなる位置をしめるのか。こうした問いをもとに、「複数の議会史 *histoire des assemblées nationales et locales*」が可能か否かを模索しなければならない。②

三点目は、直近の議会史研究の大きな特徴である名望家への着目についてである。「政治の専門職化」論をはじめ、近年の研究は、これまで「敗者」として無視されてきた第三共和政期の名望家を再評価する。このこと自体に異論はないが、こうした見方には手段と目的の混同がみられる感もある。つまり、名望家の再評価のために名望家に焦点をあて、その結果、名望家の再評価に行きつくという、結論ありきの議論に陥ってしまっているのである。第三共和政期になっても名望家社会の影響が強く残っていたことは疑いないが、それ以上に重要なのは、再編された新しい議員階層があらわれたことであるはずである。彼ら新しい政治的エリートは、一九世紀前半から中葉までの名望家とは当然異なる集団としてとらえられなければならない。現在の「旧」名望家に着目する研究は、再編されたエリート集団を片側から観察しているにすぎず、今後は視点の転換が求められる。

最後に、今後、議会史研究が大きく発展するには、研究状況の改善が喫緊の課題となる。プロソポグラフィ研究は、当人たちが意識的であったか否かはさておき、研究環境を改善するものであった。成果の公表によって、当時の議員に関する情報量は飛躍的に増加した。しかし、残念ながらこの事業がいまだ完遂されておらず、現状、おそらく完遂される望みは薄い。現在でも、たとえば議員個々人の政治的傾向や選挙に関する情報などがまとめられることはなく、研究を進めるうえでのごく基本的な情報すら容易には参照できない場合も多々ある。研究の基礎となる環境を少しずつ整備していくことが、今後の議会史研究の行く末を大きく左

右するだろう。

議会をどのようにとらえるかという問いは、フランス近現代史の語りに強い影響をおよぼすと考えられる。大革命以降の帝政や王政といった「反動」に対して、議会主義的な第三共和政において民主主義が必然的に勝利したとする第三共和政史観は、批判もありつつ、いまだ根強い。さらには、こうした民主主義の到来を一種の到達点とする歴史叙述は、何もフランス史にかぎられない。今後、議会史研究は、自らが近現代史の叙述に果たす役割を強く意識しながら進められていくべきではないだろうか。

① 数少ない政治史的要素を残す研究として、以下をあげることができる。Jean-Marc GUISLIN, «Les représentants du Pas-de-Calais à l'Assemblée nationale (1871-1875) : Élections et activités parlementaires», *Revue du Nord*, 67-267, 1985, pp. 967-993. ; Id., *op.cit.* また、少ないものの、議員活動において重要となる「弁論」、あるいは有権者に対する語りに関する一連の研究もある。Antoine PROST, *Vocabulaire des proclamations électorales : de 1881, 1885 et 1889*, Presses universitaires de France, Paris, 1974. ; Jean-Marc GUISLIN, «Parlementarisme et violence rhétorique dans les années 1870», *Revue du Nord*, 80-326 et 327, 1998, pp. 697-727. ; Nicolas ROUSSELIER, «La pyramide de l'éloquence : société politique et délibération sous la IIIe République», in : BERSTEIN et MILZA, *op.cit.*, pp. 291-302. ; Id., *Le parlement de l'éloquence : la souveraineté de la délibération au lendemain de la Grande guerre*, Les Presses de Sciences Po, Paris, 1999. ; Hélène BOURREAU et René BOURREAU, *Les députés parlent aux électeurs : les professions de foi en Loire-Inférieure, 1881-1936, monarchie et République*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1999. ; Fabrice D'ALMEIDA (dir.), *L'éloquence politique en France et en Italie de 1870 à nos jours*, École française de Rome, Rome, 2001. ; Jean-Marc GUISLIN, «L'éloquence parlementaire aux débuts de la IIIe République», *Parlement[s], Revue d'histoire politique*, 3, 2005, pp. 39-60.

② 筆者はすでにこうした枠組みの可能性を別稿にて記した。谷口良生「議会共和政と地方の「政治的議会」――フランス第三共和政前期（一八七〇－一九一四年）におけるブーシュ＝デュ＝ローヌ県の事例を中心に――」『史学雑誌』一二七－四、二〇一八年、一－四〇頁。

（日本学術振興会特別研究員）